

甲府盆地のブドウ栽培に関する地理学的考察

—特にネオ・マスカット種について—

高橋 圭子

1. 目的と方法

農作物の産地を定義する上で収量だけではなく品質を考慮することができたら—というのが大きな課題であるが、本論ではその第一歩として、比較的品質を判断しやすいと思われたネオ・マスカットを用い、各人文条件、自然条件と品質との関係を考察した。特に栽培の限界（高距限界）という不利な条件下でどのような栽培が行なわれているかを調査する事によって何らかの手掛りが得られるのではないかと考えた。

具体的には、甲府盆地斜面上でネオ・マスカット栽培が比較的盛んな白根地区、八代地区、塩山地区をフィールドとし、既存のデータ処理、聞き取り、ブドウ園調査の3方法から各地域の現況及び将来の方向を把握しようと試みた。

2. 卒論要旨

甲府盆地が一大ブドウ産地として定着した背景には、自然的に適地であった事、歴史的に古い産地であった事の2点がある。この甲府盆地でネオ・マスカット栽培が盛んになったのは戦後であるが、ここ7～8年の伸びは停滞している。理由として考えうるのが大量生産による品質の低下である。本種の特長として(1)大房系ブドウである為収量を人為的に制限して（具体的には栽培期間中に枝のせん定、摘房、摘粒等を行なう）ある程度の品質向上が期待できる(2)成熟しても緑色のままなので外見で成熟度が判断しにくい2点が特に挙げられるが、収量を上げて利益を得ようとする栽培者や、果粒が肥大した状態でまだ糖ののらないネオ・マスカットを早出しして高い利益を得ようとする心ない一部の栽培者のために質の悪い物

が消費者の口にはいり、結果的に品種の人気を落としてしまったのである。

こうした状況下で、特に条件の不利な栽培限界地区のネオ・マスカット栽培者は、農協を核として対応策を立て産地として生き残る努力をしている。実際に筆者は果粒肥大期間に果粒径の測定を行ない、標高が高い程果粒が肥大しにくいという結果を得た。また3フィールドを比較すると、御勅使川扇状地上に位置する白根町の果粒が概して小さい事から、この地区の様に土性が荒いと果粒が肥大しにくいと考えた。更に56年は盆地全般に例年の七分作という悪い出来で—これは開花期の低温や果粒肥大期の降水量不足によると考察しているが本論では絶対的裏付けができなかった—各限界地は大きなダメージを受けた。

各限界地では、次の様な対策を立てている。

- ①技術面—サイドレス栽培やホース栽培導入による成熟の早期化、果粒肥大期の灌水等
- ②農協の管理—摘房、出荷の際の糖度検査等の徹底、栽培者対象の講習会実施等
- ③市場への対応—出荷の際市場のレベルによって異なる品質のブドウをふりわけ等

農家によってはネオ・マスカットの栽培の限界地の気温の条件が巨峰、ピオーネ栽培に好適なので改植の計画を温めているが、改植に伴う経費や予想される数年間の収量減を考え二の足を踏んでいる。

早出しをあきらめ品質向上に主眼を注いだ結果か、予想に反し各限界地のネオ・マスカットの品質はそれ程低くない。品種の特性上人為的に品質を操作できるので、不利な自然条件の影響は顕著に表われないのであろう。